

西尾実と道元（II）

「否定」という思惟様式が、西尾実の著作の上に初めて姿をあらわすのは大正三（一九一四）年のことである。西尾実の論考「道元禪師」（『信濃教育』大正三年四月号）においてであった。「否定」の考え方は、西尾実国語教育論の成立と展開において大きな働きをすることになる。それだけに、西尾実における「否定」の発見は意義深いものがある。

西尾実には「否定」をもたらしたのは、道元であった⁽¹⁾。西尾実には「道元禪師」の執筆動機について「東大で村上专精先生の『日本仏教史』を聴講した感激を骨子として書いたレポーターである。」と回顧している（西尾実『信州教育と共に―初期試論集―』信濃教育出版部 昭和三九年八月 五頁）。

西尾実と道元との出会いのありようを解明するには、村上专精の講義「日本仏教史」と西尾実の論考「道元禪師」との比較検討が不可欠である。先行研究は調査の範囲では、な

かった。

西尾実には村上专精の聴講ノートがある⁽²⁾。その内、道元に関わるのは「村上文学博士述 日本仏教史 卷一」と題する一冊である⁽³⁾。本ノートは、つぎのように、十八の大見出しからなる。

栄西略伝

三 栄西の人格

四 栄西禪師ノ宗義

五 栄西ノ門下

△三傑小伝

(1) 明全小伝

(2) 行勇小伝（鎌倉）

(3) 栄朝小伝（上州）

道元禪師の出世（曹洞宗初仏）

杉
哲

道元禪師略伝

道元禪師性行

道元禪師ノ著書

道元ノ家風

第五 臨濟禪宗最盛時代の概観

(1) 臨濟宗盛ナリシ所以

二 臨濟宗ノ發展ト五山十刹

三 臨濟宗各派ノ大系

四 関東禪勃興ノ大系

「道元禪師の出世(曹洞宗初仏)」(三三三頁)より「道元ノ家風」(六七頁)までの部分を翻刻して、以下に掲げる。

翻刻に際しては、つぎの三点に留意した。

・「ノート」はペンによる横書きである。数字表記は原文に従った。漢字表記は略体(新字体)に改めた。

・読字不明は一文字当たり□と表示した。

・段落は、「ノート」の形式段落に従った。但、「ノート」において段落の改行の際、最初の一字分の下げはされていない。そこで、翻刻上も、一字下げはとっていない。

西尾実

「村上文学博士述 日本仏教史 卷二」の翻刻(抄)

〈三三三頁〉

道元禪師ノ出世(曹洞宗初仏)

道元禪師出世(見せ消ち―引用者注) 略伝

今日ノ日本ノ禪宗史ハ道元禪師ニ負フ。鎌倉時代ノ他ノ

高僧ト比較スルモ異彩アリ。

(1) 入宋前ノ道元禪師

村上帝九代ノ孫。内大臣右兵衛大将東宮大傅従一位久我通親公ノ子。母ハ摂政太政大臣従一位藤原基房ノ女。

当時ノ皇族貴族ノ出家ハ異トスルニ足ラサルモ一宗ノ始祖トナレルハ道元ヲ以テ唯一トナス。

土御門帝正治二年一月二日京都ニ生ル。三才ニシテ父ニ別レ八才ニシテ母ヲ失フ。(此点ハ親鸞ト共ニ考ヘ可シ殊ニ此時世ハ武門跋扈シテ公卿ハ逆境)加フルニ母ハ末期ニ及ビ遺命スルニ懇口ニ出家ノ事ヲ以テセリ。母モ夫ノ死後此心アリシ也。児童深ク期スル所アリシナラン。

四才ニシテ李嶠百詠ヲヨミ七才ニシテ周詩一篇ヲ賦シ毛詩及春秋左氏伝ヲ読ム。人皆驚キテ神童ト称ス。門ヨリスルモ天才ヨリスルモ世俗顕榮ノ地ヲウルニハ余アリ。母ノ遺

命モアリ自ラモ志アリテ仏門ニ入り、世親菩薩ノ俱舍論ヲ九才ニシテヨミ。人ノ問フアレバ弁疏流ルルガ如シ。耆年宿徳モ其顛異ニ歎服シ擬スルニ文殊ノ化身ヲ以テシ真個大乘ノ道器ト称セリ。

叔父藤原師家公養子ニセントセシモキ入レズ即建曆二年春十三才ニシテ家ヲ脱シ叡山ニ上リ良顛〔引用者注〕「顛」の下に「(觀)」という書き込みあり〕法眼ノ室ニ入ル。良顛〔引用者注〕「顛」の下に「觀」という書き込みあり〕ハ叔父ニ当ル。

(良觀ハ師家公ノ弟)〔以下、この行、余白〕

〔引用者注〕本頁の右余白部にニヶ所の書き込みあり〕
勅諡仏性伝東国師承陽大師。諱ハ道元。希玄ト号ス。
李嶠雜詠ハ李巨山詩集。

〈三四頁〉

△正治二年正月二日ハ太陽曆紀元千八百六十年一月二六日

△其胎ニ在ルヤ、一日空中ニ声アリ告ケテ曰。

貴孕は此五百年來の大聖にして、正法を日本に弘通する為め降臨托胎す、ト〔表記は原文のママ―引用者注〕

△建仁二年大師年三才。十月二十日敝父通親公薨去セラル。是ヨリ仲兄大納言通具公、大師ヲ養育シ、鍾愛備ニ至ル。

△慈母ノ命終ニ臨ミ給フヤ、大師ヲ枕頭ニ招キ、丁寧ニ訓誡シテ曰ク、吾カ亡キ後ニハ必ず剃髮染衣して、仏法を修行し、逝きにし父母の冥福を資け、兼ねて四生六道の業苦を救フヘシ、ト〔表記は原文のママ―引用者注〕

△大師ノ發菩提心。

承元元年冬慈母藤原氏薨去セラル。悲哀措ク所ヲ知ラス。弔葬ヲ高尾寺ニ修行セシニ、大師龕前ニ跪キ拈香揖拜シ、香烟ノ霰々トシテ上リ、深く諸行無常ノ理致ヲ感悟シ、乃チ出家求道ノ志ヲ決定シタマフ。

〈三五頁〉

自ラ憶念シタマハク。

流転三界中、恩愛不能斷。棄恩入無為。眞実報恩者ト。

〔一行空白〕

良顛〔引用者注〕「顛」の下に「觀」という書き込みあり〕驚キ迎へ本意ヲ尋ヌルニ、只母末期ノ遺命ヲ以テス。飲食ヲモタツベシ。〔この後、数字分空白〕

親ノ養育ノ恩ハ〔徳ヲ以テ報ユベシ〕トス。其決心ヲ見ル

ベシ。良顕之ニ任シ時ノ座主公円僧正ニ託ス。剃髮セシメ、翌年四月登壇受戒セシム。(天才早熟ノ人、五十何才ニ死ス)

道元八十才迄ニ漢学ノ修養ヲ終リ、ソレヨリ仏典一切ヲ涉獵セラレシナリ。

コレヨリ五年御山ニアリテ顕密二教ヲ学ヒ閲読ニ回ニ及ビ、大小ニ乗修メサルナシ。然ルニ彼ハ学ブニ從ヒ疑問ノ解決シ得サルモノアリ。即顕密二教ニ於テ共ニ談ズル本来本性天然自性身ニ就テノ疑問ナリ。理屈ニテスム人ニアラズ。身ニ体得セザレバヤマズ。若シ自己ノ心身「身心」ノ二文字見セ消ち―引用者注) 身心ニシテ本来法性ヲ有シ天然ニコレ仏身ナリトセバ三千ノ諸仏ハ何故ニ発心出家シテ修行ノ功ヲ俟ツカトトノ疑問ハ研究ノ歩ヲ進ムルニ從ヒ益々一疑問ノ来リテ自ラ放テキスル能ハサリキ。乃山門ノ碩学ニ質スト雖モ未ダ其要領ヲ得ズ。時ニ三井寺光胤僧正ハ觀心(天台止觀)ニ明ナリトキキ自ラユキテ其指導ヲウケントス。光胤ツゲテ曰ク疑問ノ趣、本宗ニ於テモ伝教、慈覺以來相伝ノ家訓ナキニシアラズ。未ダ全備ヲツクサズ。

〈三六頁〉

△尋イテ横川首楞嚴院ノ般若谷ノ千光房ニ留学セシメラレキ其翌年建保元年大師十四才、四月九日。天台座主公円僧正

ニ就キテ薙髮シ其明十日。公円僧正ヨリ菩薩ノ大成ヲ稟承シ比丘トナリタマフ。

〈三七頁〉

伝ヘキク大宋ニ仏心伝授ノ宗旨アリ。今ヤ天下ニ布ケリ。名ケテ禪宗ト謂フ。

モシ此事ヲ糺サントセバヨロシク渡海スベシト。道元入宋ノ初心ヲ見ルベシ。

但先ツ建仁寺ニ赴キ榮西禪師ニ是ヲ問ヘト。(事実トセバ光胤ハ実ニ公論ナリトイフベシ)

道元此教ニヨリ本山ヲ辞シ、京都建仁寺ニ赴ク。

但建仁寺入室ニツキ二説アリ。一ハ建保二年十五才トシ、一説ハ建保五年十八才ナリトノ説、コレナリ。十五才ノ時トスルト榮西生前入門ノモノトス。十八才ニナルト榮西没後ニ明全ノ門ニ入ルトナスモノアリ。(伝光録、三祖行業記ハ十八才。村上氏モ初ハカウ信ゼシモ今ハコレヲスツ。正法眼藏(九九卷)ノ弁道話中ニ「予発心求法ヨリ此方我朝遍方ニ知識ヲトモラヒキ。因ニ建仁寺ノ全公ヲ見ル。相從フ籍華速カニ九回ヲヘタリト。」

〔二行空白〕

九カ年〔以下、この行、空白〕

正法眼藏隨聞記ハ道元ノ座談ヲ弟子懷非ノ事ヲ記スル所ナ

ルカ其中ニ先師和尚「以下、この行、空白」
故僧正又ハ「この後、数字分空白」典座教訓中先師禪公

〈三八頁〉

「この頁、全て空白」

〈三九頁〉

コレアリ。見ルニ明全ヲ師トシ榮西ヲ師トセザル如シ。然レトモ委細ヲ考フルニ先ノ「数字分空白」霜華速カニ九回ヲ経タリノ伝アリ。禪師ノ入宋ハ貞応二年ナルカ。禪師ノ建仁入室ハ建保二年榮西入滅ノ前年ナラザルベカラズ。建仁入室ハ建保二年ナリシモ寿福寺造営ノ為榮西ハ多ク鎌倉ニアリテ建仁□□務ハ明全ノ司ル所ナラン。帰リシトキ病アリテ其教ヘニ接スル能ハズ。即チ道元ノ臨濟禪ハ明全ヨリ之レヲ伝ヘラレシナラン。

禪師已ニ建仁寺ニ入ルト云ヘドモ、先ニ公胤ニ渡海スベシト云ハレシ事アリ。其時ヨリ入宋求法ノ志アリ。□□アルベカラズ。入室後常ニ明全ト共ニ時期ヲ待タレシ事九年。(コノ二人ハ意気投合セシナリ)後堀河ノ貞応二年三月下旬相携ヘテ筑前博多ヨリ船商ニヨリ渡海ノ途ニツク。

「正法眼藏随聞記」ヲ見ヨ。

同行者ノ廓然、高照、加藤景正(瀬戸陶器商人ナリシ人)

ノアリシ事明カナリ。

(2) 入宋中ノ道元

筑前ヲ発セシ一行ハ翌月宋国浙江省慶元府ニ到着シタリ。暫クハ船中ニアリテ時々上陸シテ風俗ナド見七月ニ至リ、船ヲイデ太白山天童景德寺ニ入り、無了了派ニアヒ

〈四〇頁〉

△五月四日阿育王山ゴウの典座舟ニ抵リテ榭シモトケヲ購フ。因ニ大師相見シタマイヒテ教番ノ問話アリ。永平清規典座教訓ニアリ見ヨ。

△景德寺ニ於テ二人共ニ新戒ノ位次ニ排セラル。(明全ハ四十、道元ハ二十四)乃寧宗皇帝ニ訴ヘタマフ。其上表モアリ。是ニ於テ矯正サルト。

△大宋宝慶元年乙酉五月一日。道元ハシメテ先師天童古仏ヲ妙高台ニ焼香礼拜ス。先師古仏ハシメテ道元ヲミル。ソノ時、道元ニ指授面授スルニイハク、仏仏祖々、面授ノ法門現成セリ。コレスナハチ靈山ノ拈花ナリ。嵩山ノ得髓ナリ。黄梅ノ伝衣ナリ。洞山ノ面授ナリ。コレハ仏祖ノ眼藏面授ナリ。吾屋裏ノミアリ。余人ハ夢也未見聞在ナリ。コノ面

授ノ道理ハ釈迦牟尼仏、マノアタリ迦葉仏ノ会下ニシテ。
〔面授シ護持シキタルカユエニ。仏祖面ナリ。仏面ヨリ面
授セサレハ諸仏ニアラサルナリ。(中略)世尊ト迦葉ト、同
座シ同衣シキタルヲ一代ノ伝儀トセリ。迦葉尊者。シタシ
ク世尊ノ面授ヲ面授セリ。面授セリ。釈迦牟尼
仏ヲ供養恭敬礼拝奉現シ、タテマツレリ。ソノ粉骨碎身イ
ク千万變トイフコトヲシラス。自己ノ面目ハ面日ニアラス。
如來ノ面目ヲ面授セリ。―正法眼藏 面授―

△道元大宋国宝慶元年乙酉夏安居時。先師天童如淨古仏大和
尚ニ参侍シテ、コノ仏祖ヲ礼拝頂戴スルコトヲ究尽セリ。
唯仏与仏ナリ。―正法眼藏 仏祖―

〈四一頁〉

シモ氣韻相合ハス。僅カニシテ其許ヲ去リ、他ノ禪師ヲ訪
ヒシモ慈服スル能ハス。宋国ニモ我師ナシト思ヒ天童山ノ
明全ヲ伴ヒテ帰国セントスルヤ、一老人無際了派ニ代リテ
如淨ナル大徳天童山ニアリト。勇ミ立チテ天童山ニ帰り来
ル。

仏々祖々面授法門今現成ト云フ。道元禪師焼香礼拝ノ末其
來歴ヲ告白シテ如淨ノ知遇ヲウケ昼夜ノ別ナク出入シ、師
弟ノ交情密ナラズ。一夜禪室ニアルニ、如淨五夜廻リ来リ

警戒シテ曰ク「座禪ハ身心ヲ脱落スルニアリ。只管眠ルハ
何ノ故ゾ」ト、道元コノ一言ノ下ニ傍聴シツツ悟リ、直チ
ニ方丈ニ上リ、焼香礼拝ス。師何故ニ焼香礼拝スルゾト答
ヘテ曰ク。身心脱落シ来ル。淨祖曰身心脱落、脱落身心ト。大
師曰這箇ハ是暫時ノ伎倆。和尚乱ニ某甲ヲ印スル事ナカレ
ト。淨祖曰脱落身心。大師礼拝シ給フ。是歳九月如淨ヨリ
仏祖正伝ノ大成ヲ稟承シ給フ。即菩薩ノ大成也。

思ニ身心脱落ノ一句ニヨリ、サキノ仏々祖々面授法門今現
成ノ句ヲ悟リシナラン。シカノミナラス叡山ニアリシヒニ
已ニ發シ公胤ニタタス所アリシ大疑問ヲ此時初メテ凍解セ
シナラン。入宋ノ目的ハ茲ニトゲラレシナラン。(正法眼
藏 仏祖卷、面授卷ヲ見ヨ。)コノ中ニ釈迦相伝ノ秘訣ヲウケ
タソト。

宝慶元年五月一日。更ニココニアルコト三年ニシテ宋国宝
慶三年冬ニ至リ、帰国ノコトヲ如淨ニツグ。如淨コレニサ
ヅクルニ

〔引用者注―本頁の右余白部に一ヶ所の書き込みあり〕
宝慶元年ハ我嘉祿元年也。

〈四二頁〉

大師ヲ召シ。芙蓉楷祖ノ袈裟、宝鏡三昧、五位顯訣。

並ニ自贊ノ頂相ヲ授ケ。告ゲテ曰ク。汝ハ異域ノ人ナルヲ以テ。之ヲ授ケテ大法嗣承ノ信ヲ表スルナリ。国ニ帰リテ大法ヲ宣布シ、広ク人天ヲ利濟スベシ。又城邑聚落ニ往スルコトナカレ。國王大臣ニ親近スルコトナカレ。只深山幽谷ニ居シテ。一箇半箇ヲ接得シ。吾宗ヲシテ断絶セシムルコトナカレ。ト

〔一行空き〕

芙蓉楷祖…釈尊第四六世ノ正嫡。淨祖六世ノ祖。

宝鏡三昧…洞山悟本大師ノ垂訓。

五位顯訣…曹山本寂禪師ノ教示。

悟本大師ノ垂訓ナル正偏□□ノ法門ヲ祖述セシ

モノ。

〔四三頁〕

村上氏の説

十三ニ叡山ニ上リ

十五才ニ建仁寺ニ入ラレタカ

此ニ九カ年

弁道話(道元)

二九カ年居ルトアリ

故ニ二十五才タル也

(曹洞ノ中興)

芙蓉道楷ノ袈裟、自讃頂相、宝鏡三昧、五位顯訣(曹洞宗初祖ノ著)ヲ与へ、更ニ自讃ノ頂相(道元ノ性向ハ芙蓉道楷ニ学ブ所多シ)ヲソへ(道元ノ言葉ハ如淨ニ学ブ所多シ)告辭トシテ

莫住城邑聚落 莫近國王大臣 只居深山幽谷 接一箇半箇ヲ与フ。コレ道元ヲ全ク支配セン教訓ナリキ。

此ノ如キ「数字分空白」此ノ如キ告辭ヲウケ肥後□ニツカル。ツギテ京都ニ上リ建仁寺ニ入り明全ノ遺骨ヲ榮西ノ傍ニ葬ル。時ニ二十八才。(明全ハ天童山ニ道元ガカヘルトキ病ナリキ)

明全ハ臨濟禪ニカナヒ、道元ニハコレガ合ハザリシナラン。道元ノ別伝ニハ悉ク(元亨釈書、本朝高僧伝ニハナシ)新来ノ比丘尼僧トシテ取扱ハレシ事アリシヲ載ス。コレヲ憤慨シ僧臘ノ年数ヲ以テ席次ヲ定ムベシ。□□□□異人□ナラスト主張セシモ耆宿曰ク中華叢林ノ古例トシテコレヲ採用セズ。宋朝ニ直奏スルコト三回。理ニアイタルトシ其上表ヲ入レ諸山ニ勅命ヲ下ス。コレヨリ旧来ノ幣ヲアラタメタリト。コレ公平ニ考ヘテ疑問ナリ。大事件タルニ他書ニ見エズ。又上表ノ文伝ハラズ。□□□各著□□元本ナシ。二回トスルト、二回トスルト、渡海後直チニナリ。

〔四四頁〕

淨祖或時後夜ノ座禪ニ入堂シ。大衆ノ睡眠スルヲ嚴戒シテ曰ハク。參禪ハ須ラク身心脱落ナルベシ。只管打睡シテ什麼ヲ為スニカ堪ヘント。大師傍ニ於イテ豁然トシテ大悟シ。直チニ方丈ニ上リテ焼香シタマフ。淨祖問ヒテ曰ハク。身心脱落。脱落身心。大師曰ハク這箇ハ是レ暫時ノ伎倆。和尚亂ニ某甲ヲ印スルコト莫レト。淨祖曰ハク脱落身心。大師禮拜シ給フ。―大師伝。

〔四五頁〕

(3) 婦朝後ノ道元

後堀川ノ安貞元年婦ル。三年建仁寺ニ在テ來訪者ニ接セシモ自ラカカル生活ヲ好マズ。天童如淨ノ訓戒スル所モアレバ幽棲ノ心切ナリ。

伝光録ニ此事アリ。典座教訓ニ建仁寺ニ兩三年トアリ。

宇治深草ノ里ニ安養院ナル一ノ廢院アリ。而シテ道元ハ寛喜二年建仁寺ヲ辭シ茲ニウツリス。然ルニ同族ノ後ヲ尋ネ來ルモノ多ク院ノ狹隘ヲツグルニ宇治弘誓院正覺禪尼（貴族出家ヲシ）ノ發願ニヨリ安養院ノ傍極樂寺旧地ニ一字ヲ建立シ道元ヲ之ニ迎フ。道元乃チ觀音導利院興聖宝林禪寺ト命名シタリ。院号ハ前ノ寺ノ院号其ママ也。村上氏ノ想像ニヨレバ伝教ハ国宝ヲ作ル考ヘニテ叡山ヲヒラケリト。

道元ノ此寺ハ国宝タルベキ聖僧ヲ作ランガ為ニハアラザルカ。日蓮、親鸞、法然ハ偏ニ教化スルニアリシモ、道元ハ僧侶ノ聖ナルモノヲ養成セン事ニアリキ。

此寺ハ略シテ興聖院トイフ。四条帝天福元年ニシテ道元ノ深草ニウツリシヨリ三年ナリ。爾來、十有年禪那トナシ本邦未曾有ノ叢林ニテ嚴格ナル正規ノ下ニ養成セラレタリ。此□□□アリ。

普勸座禪儀ハ建仁寺ニテツクレリ。此二年典座教訓伝光録及ビ學道用心集、正法眼藏四五卷ハココニナレリ。

コレニツギテ徒弟一般ノ□□□ヲ□□□スベキナリ。シカルニ深草ノ地タルヤ京師ヲ去ルコト遠カラズ。從テ月卿雲客

〔引用者注―本頁の右側余白部に二ヶ所の書き込みあり〕
深草ノ仏法房（マ）の聖人

嘉禎元年冬企圖翌年十月十五日祝国開堂ノ大札ヲ挙行ス。

〔四六頁〕

〔この頁、全て空白〕

〔四七頁〕

ノ車馬ノ往來漸々繁ナラントス。コレ道元ノ深ク厭ハレシ所。更ニ幽棲ノ地ヲ求ムル心アリ。乃波多野義重（カネテ

婦依)ガ領地越前国吉田郡ノ深山ニ古寺アルヲ以テココニ
道元ヲ迎ヘントス。忽チ□ニ応シ宇治ノ興聖寺ハ弟子義準
ニユヅリ、自ラハ懷辨以下ノ弟子ヲ引キツレテ越前ニ赴ケ
リ。時ニ寛元元年七月吉峰ニウツリ翌寛元二年九月今ノ永
平寺ノ伽藍落成。初メ大仏寺トイイシモ後永平寺ト称ス。
村上氏ノ考ヘデハ越前ニ行クコトアマリ突然。コレニハ何
カ事情アラン。深草ヲ厭ハシクナリシナラン。禪僧ハ山ヲ
好ミシ如シ。今ノ僧ハ俗化サセントス。

道元ハ禪宗ノ根本ノ寺タラシメント□セリ。其志空シカラ
ズ。今日トナレリ。

△北条時頼ノ懇願モダシカタク宝治元年八月ヨリ翌二年迄
鎌倉ニ行ケリ。此時時頼弟子ノ礼ヲトリ菩薩戒ヲウク。
一字ヲ築キ在留ヲ請ヒシヲ辞シテ帰ラレタリ。時ニ宝治
二年。後時頼宋僧道隆禪師ヲ請シテ住持タラシメキ。今
ノ建長寺其也。

〔引用者注―以下の記述については「後ノ伝記者ノ附加」
という注記あり。〕

△道元禪師行録

三相行業記等ニ時頼ガ其領地寄附ヲウケサレキト建擲記
ニハ誇大シテ時頼ガ玄明ニ二千石ノ寄付状ヲ托ス。辞シ
テウケス。受ケテ来リシヲ怒テ云々。面山コレヲ訂正シ

テ玄明ノコト古記ニ見エズ。

△仏法禪師号ト紫衣ヲ後嵯峨ヨリ送^{マツ}ラル。勅使三回。

〈四八頁〉

京都ニ下ラレテ高辻兩洞院ナル俗弟子覚念ノ家ニ投ジ給フ。

〈四九頁〉

漸クウク。サレトモ一生用ヒズ。一詩アリト。

コレモ面山僧勅号ノ事ナシト。仏法ノ事ハ房号也ト。

禪師号ノナカリシハ道隆ニ大覚禪師号ノ下リシカ為メ也。

コノ人ハ後也。

コノ号ノコトハ恐ラク芙蓉道楷ノ故事ヨリ附会セシナラン。

(名利ノ為ニ出家セズ云々)五燈会元十四卷ニ道元ノ伝ア
リ。

〔引用者注―「後ノ伝記者ノ附加」という注記の対象は、
ここまで。〕

〔一行空き〕

建長四年夏ヨリ微恙ナリ。サレトモ徒弟ノ訓育ニ怠ラズ。

殊ニ同五年正月ニハ遺教経ヲ講ズ。恐ラク末期ノ感アリテ

セシコトナラン。

正法眼蔵ノ中、八大人覺ノ卷ハコノ講名ナリ。

果シテ其病ハ漸々重ク、建長五年八月五日ヲ以テ京師ニイ

テ、後嵯峨上皇ノ侍医ノ治療ヲウケラレシモ薬功ナク同月二十八日五十四才ニシテ逝カル。

(時ハ日蓮ノ獅子吼起リシ年)

永平寺ニアリシ事僅カ二十年。遺骨ヲ永平寺ニ埋ム。

没後六百余年孝明帝嘉永七年二月仏性伝東国師。

明治十二年十一月承陽大師ト諱セラル。

〔一行空き〕

参照

道元禪師行録、伝光録、建搦記、三祖行業記、永平広録、

承陽大師伝

〈五〇頁〉

△従来ノ身心ヲ放下シテ。只直下ニ他ニ従ヒユケバ。

即チマコトニ道人トナルナリ。是第一ノ故実ナリ。

〈五一頁〉

第二

道元禪師性行

古来高僧其数多シト雖独リ道元ハ其類ヲ異ニスルモノアリ。

奈良朝ニ求メントスルモ、行基、良弁ト固ヨリ比スベクモ

アラス。又、平安朝ニ其例ヲトラントスルモ最澄空海等ト

又比スベクモアラス。(コレ等ハ半官人)

近ク鎌倉時代ニアリテ見ルモ、榮西、弁円ト伍スベクモアラズ。又、源空、親鸞、日蓮ト伍スベクニモアラス。

蓋シ強ヒテ類ヲ求メレバ、明恵上人高弁ナランカ。

道徳心ノ堅固、氣概ノ鋭キ所等、二者相類スルモノアリテ

存ス。道元ハ深草在院ノトキヨリ自ラ仏法房ト号シ、人亦

コレヲ以テ呼ブト。即道元ハ自己ヲ以テ全ク仏法ニ同化シ

テ仏法ノ外ニハ個人ナシ。個人ナキガ故ニ一点ノ名利心ナ

ク終生仏法ノ為ニ尽セルコソコレ道元ノ一生也。

学道用心集ニ「法転我 我能転法出時 我強法

弱也 法転我出時 法強我弱也」ト。

即道元ハ法転我ノ結果法強我弱ノ人トナリシナリ。是ヲ以

テ自身ノ為ニ仏法ヲ守ス可ラズ。名利ノ為ニ果報ノ為ニ

仏法ヲ守ス可ラズ。只仏法ノ為ニ仏法ヲ守スベシトノ教訓

ヲ立テタリ。

正法眼蔵随聞記(座談)(道元全集第三卷)ニコレニ類スル

言葉多シ。一節ニ、

学道ノ人ハ吾我ノ為ニ仏法ヲ学スルコトナカレ。只仏法ノ

為ニ仏法ヲ学セヨ。其故実ハ我身心ヲ一物モ残

〈五二頁〉

法然…俗世ニ同ジ、而シテ高キヲ仰ガシメテ潔クス

道元…世ニ抗シテコレヲ潔クス

〈五三頁〉

サス放下シ仏法ノ大海ニ廻向スベキナリ。其後ハ一切ノ是非ヲ管スルコトナク、「以下、この行空白―引用者注」ナシ難ク忍ビ難キコトナリトモ仏法ニツカハレテ強テコレヲナスベシ。我心ニ強ヒテナシタキ事ナリトモ、仏法ノ道理ナラザル事ハ放捨スベシ。

名利ニハナレ、我ヲハナレ、清貧ニ甘ンズ。コレ全卷ニミツ。道元性行明カニセントセバ其著永平清規、随聞記、学道用心集等ヲ読ムベシ。

宗教的權威ヲ以テ云々（この行見せ消ち―引用者注）

1 試シニ榮西ニ対照スルニ榮西ハ巳ニ僧正ニ任シ紫位ヲ拜スト雖モ道元ハ終生平僧ニ以テ終ル。

2 彼ハ幕命ヲ奉ジ、建仁、寿福、亦金剛ト歴任スト雖モコレハ只一回、時頼ノ懇請ニ応ジシコトアルノミ。

3 彼ハ京、鎌倉ヲ往還シ、朝、□□ニ出入スト雖モ此ハ自ラ華族ノ出ナルニモカカハラズ、未タ一回モ宮中ニ出入スルコトナク、タトヒ近親ノ者ト雖モ貴族、顯門ノ交際ヲタチ、初メ深草ニ閑居セシモ後ハ越前ニユカレタナリ。大師弟子共ニ座禪弁道ヲ以テ畢生ノ要務トナス。如斯ハ道元其人ノ性ニ基ク所ナルベキモ亦以テ天童山如淨ノ訓戒ヲ守ルト共ニ遥ニ芙蓉道楷ニ私淑セン事思ハシム。

〈五四頁〉

△いはぬ古仏のいへる事あり。死の中に生けることあり。いける中に死せることあり。死せるがつねに死せるあり。いけるがつねにいけるあり。これ人の1ひもしかあらしむるにあらず。法のかくることしなるなり。

△仏法ハ人ノシルベキニハアラス。コノ故ニ昔ヨリ凡夫トシテ仏法ヲサトルナシ。ヒトリ仏ニサトルルユエニ唯仏与仏乃能究尽トイフ。―正法眼藏唯仏与仏。

〈五五頁〉

三 道元ノ著書

△「引用者注―△の左下に、縦書きで「緒言」という書き込みあり。」

仏教界ノ高祖ニテ著書ニトムハ教育家ノ人ニ多シ。義解ノ書ノ人ニ多シ。淨慧ノ部ノ人ハ著書多シ。禪家ハ不立文字從テ著述ナキ筈。永明知覚禪師ハ宗鏡錄百卷ヲカケリ。禪家ニメツラシ。教禪一致ヲ主トセル人ナリ。禪家ノ著述ハ語録トイフ。即高祖ノ講話問答ヲノセシモノ。シカラザレバ師伝ナリ。伝光録：等。相讓、相伝ヲ重スルヨリ師伝ヲカク。即「以下、この行空白―引用者注」

我国ニテハ元亨積書、本邦高祖伝、伝光録等師伝物ハ禪宗ノ人ニ多シ。鎌倉時代ニ名著多ケレトモ五山文学ニテ

詩集文集ノミ。仏書トイフベキニ非ズ。

註釈的、組織的ノ著述ハ其宗旨上禪宗ノ人ニハナシ。從テ古來著名ノ高僧ト雖モ只其語録ヲ後世ニ伝フルノミ。

△「引用者注—△の左下に、縦書きで「道元著述ノ特色」という書き込みあり。」

シカルニ道元禪師ノミ独他ト其□□ヲ異ニスルコトアリ。生年僅カニ五十四才ニテ終レルニモ似ズ頗ル著書ニ富ム。

シカモ其著ハ□□ノ師伝ノ類語録ノミニ限ラズ。語録ニテハ永平広録ト題シコレハ十卷トシテ伝フルモノナリト雖モ其他ノモノ頗ル多シ。即著書ノ追求ハ弟子ノ訓誨ニ

アラサレハ叢林ノ正規ナリ。シカラサレバ其独特ノ所見即禪觀ヲモラス所ナリ。

カクノ如キ種々著作ニトメルハ禪宗ニテハ古今ニ其例ヲ見サルトコロナリ。コレ道元其人ヲ研究スルニツキ注意スベキ要点也。

△普勸座禪儀一卷

安貞元年帰朝ノ時ノ作伝道ノ序幕也。

〈五六頁〉

△学道用心集

第一可発菩提心事。第二見聞正法必可修習事。第三仏道必修行可証入事。(仏言。行乃証在其中)第四用有所得心

不可修仏法事。第五參禪学道可求正師事。第六參禪可知事。第七修行仏法欣求出離人須參禪事。第八禪僧行履事。第九可向道修行事。第十直下承当事。

〈五七頁〉

△学道用心集一卷
仏教ノ正伝ハ座禪ノ外ニアラス? 釈迦已ニ然ルニアラバヤト。

△正法眼藏九十五卷。(叢書也)
天福二年三月、宇治興聖寺落成ノ時作。參禪ニツキ注意スベキコトヲ十ヶ条ニワケテ説キシ指南書。

△永平清規二卷
後堀川寛喜三年 後深草ノ建長五年ニ至ル、道元三十一才ヨリ五十四才ノ末期迄二十三年間ニワタリ宇治深草並びに越前永平寺等ニ於テ弟子ニ教訓セラレシ時ノ稿案也。(文章ノ解義ニクルシムモノナルハ稿案タルヲ以テ也) 其多数ハ稿案ノ叢書トイフベキモノ也。

△永平広録十卷
天座教訓、弁道法、赴粥飯法、衆寮清規、対大已法五夏開梨法、知事清規等。嘉禎三年「一字分空白」宝治ニ至ル十二年間ノ篇述也。

△永平広録十卷
語録並ニ詩文。他ニ詩集アリ。

△正法眼藏隨聞記

座談ヲ弟子懷牂ノ篇セシモノ也。

(禪僧ニテ五十何才

多数、種類)

是等ハ載セテ「承陽大師聖教全集(三卷)」ニアリ。

發行所 東京市芝区芝公園五号地永平寺出張所

〈五八頁〉

「この頁、全て空白」

〈五九頁〉

(4) 道元ノ家風

△「引用者注―△の左下に、縦書きで「柴西ト道元トノ比較」という書き込みあり。」

柴西ハ臨濟禪ヲ伝ヘ来リ。道元ハ曹洞禪ヲ伝ヘ来ツテコレヲヒロム。コレ根本的異同アル所以ナリ。

道元初メ明全ヨリウクルトコロハ柴西邦伝ノ臨濟禪ナルモ、シカルニ入宋シテ臨濟派無際並ニ径山ノ如瑛等ノ祖師ニ参ストイヘドモ氣韻相合ハス。シカルニ後天童山ニカヘリ、曹洞系ノ如淨ニ会フヤ恰モ旧知ノ際会スルニ似タリトイハシカ。別居セシ親子ノ再会セル如キモノアランハ何故カ。コレ元来如淨ト道元ト心理的ニ相冥契セントコロアリシナ

ラントイフ外ナキ也。

換言スレバ道元其人ノ性質上臨濟禪ハ合ハサリシナラン。

コレニ加フルニ柴西ハナルベク世ト□□スルガ其態度ナリ。

折衝其ヨロシキトコロニ於テ邦伝ノ禪ヲヒロメントス。コレハモト禪刹トシテナレル建仁寺ニ於テ台伝ノ批難アルタ

メ真言止観ノ二院ヲ設ケテ台密二教ヲ修セントセリ。

道元ハモトヨリ世ト□□セントスル考ナク、タター一図ニ□

□□所信ヲツラスカントス。故ニ他ノ台密ト調和セントス

ル如キ態度ナク、自ラ超然トシテ世界ニ独歩シ、他ノ来ヲ

求ムルニハアレバアヘテコレヲコバムニアラサルニモ其来

ラサル。コレ□□□□アリ。□ラムカエントスルガ如キ事ヲ

ナサザリシハ道元ノ態度ニシテ、(如淨訣別ノ言葉ヲ思ヘ)

従テ兩者其家風ニ異点アルヲ思フベキナリ也。

〈六〇頁〉

「引用者注―下から八行目から、以下の書き込みあり。」

尽十方界。是沙門眼。

。是沙門家常語。

。是沙門全身。

。在ココ自己光明。

。在ココ自己光明裏。

。無一人不是自己。

味ヲ一読スベシ。光明藏三昧ハ道元ノ光明卷ヲ敷衍セシモノナリ。

モシ光明藏三昧ヲ□□スレバ招賢大師ノユハフル光明ノ何者ナルヤホボコレヲ悟了スルニ難カラザルベシ即密教ニ所謂阿字本性モシクハ大日如来也。

(万有ノ本体) (光明)

禪家ニ所謂本来ノ面目モシクハ父母未生以前ノ心、華嚴ニ所謂無尽法界天台ニ所謂諸法実相ノ如キ其意味、所以(意味、所以)見せ消ち(引用者注)ヲ異ニスルニ從ヒ術語ヲ異ニスルトモ今ヤコレ其モノヲ概ニテ大光明トイフ。

〈六四頁〉

「この頁、全て空白」

〈六五頁〉

懷辨ハ大日経、□□経、華嚴経ヲ引キテ

サレバサキニ招賢大師ノ尽十方界是自己光明……

在自己光明裡トイヘルハ各種大乘経ニ散見スル所ノ真如ナリ。一如ナリ。或ハ仏性ナリ。法性ナリトイフベシ。而シテ天童如浄ガ「仏々……」トイヘルモノ即コレ、道元ハコレヲウルニ言句ヲ以テセス。

身心脱落ヲ以テコレヲ得タルナリ。身心脱落トハ他ニアラ

ズ。吾我ヲ離ルル所ニ存ス。如浄ノ大光明ハ本来成就シテシカモアラハレサルハ何故カ畢竟吾我ニククルルガ故也コレモシ吾我ヲハナルレバ真ニ「仏々……」也。

故ニヨロシク身心脱落スベシ。座禪ノ要□□身心脱落ニアリ。但吾我ヲハナルトイフトモ普通ニイフ無我ト大ニ其趣キヲ異ニスルモノアリ。光明藏三昧ノ結文ニ謹ンテ究參道士ノ人ニ曰ス。一機□□ヲトルコトナリ。見解聰明ヲ頼ムコトナク、長連牀上ノ学徳ヲ携ヘズ身心ヲ以テ上來ノ光明藏中ニ放ゲシ終テ再ビカヘリミズ。悟ヲ求メズ、迷ヲハラハバ念ノ起ルヲキラハズ。念ヲ愛シテ相統セズ。マサニ大座スベシ。汝ガ念ヲ愛サンニ念一人□□ニアラズ。一度ニ□□ノ如ク一団ノ火ノ如ク出息入息□□□□前時ニト□□□□アレバ座断スベシ。タトヘ八万四千ノ雜念起滅スルモ当人トリアス。捨果ヲスレバ一念

「引用者注―本頁の右側余白部に一ヶ所の書き込みあり。

しかし、すべて見せ消ち。」

これはたしかに懷辨の見解である。この中には甚しく隙間のある□□がある。□か禪宗に首肯□□□□る点もここにある。これは禪宗に対する□□の不味の致す所か。

〔六六頁〕

「この頁、全て空白」

〔六七頁〕

一念般若ノ神通光明トナルベシ。ト謂フ所ノ身心ヲ以テ大光明藏中ニ放下シ終ツテ二度顧ミサルハ身心脱落也。

又悟ヲ求メズ、迷ヲハラハストスルトコロハ実ニ曹洞禪ノ臨濟禪ト異ナル所以也。道元ノ家風ハカノ考案ヲアタヘズ喝手段ヲカサズ。モトヨリ迷ノ存スルニアラサレバ又新ナル悟ノ来ルベキナシ。吾等ハ本来ノ古仏也。巴ニ本来ノ古仏ナレバ座禪弁道ハアヘテ悟ヲ求メンタメナラズ。迷ヲハナレザルニ光明藏ノ所作ナレバコレヲ呼ンデ証上ノ修トイフ。シカモ証上ノ修トシテ規律儀式の厳格ナルコト又他ニ類ヲ見サル所也。

(殊ニ重雲堂式ヲ見ヨ。)

道元禪師ノ門下

大徳ニテ終生弟子養成ニツクサレシモ弟子少シ。

懷辨、僧海、詮慧、了然ノミ。

建徳記ニハ二十余人ヲアグ。

懷辨一人ノミ。聖一國師□□ニ比シ門弟少シ。

1 年令長ゼラル内ニ世ヲ去ラレシコト。

2 禅氣ガ日本ニ□セザルコト。

3 富黄顕榮ト遠カリシ故、道心幼キモノハココニ行クニ少カリシナラン、只厳格

サレトモ其積神アリシ故後世ニ至リ実現セシ也。

以上が道元に関わる部分の翻刻である。

(この項、続く)

(注)

(1) 杉哲「飯田時代の西尾実(五)」『国語科教育研究論叢』第

二号 九州国語教育研究懇話会 一九九八年三月三十一日

(2) 「西尾文庫」蔵(長野県下伊那教育会)

(3) 杉哲「西尾実と道元」『熊本大学教育学部紀要』第四九号

人文科学 二〇〇〇年二月一五日

(すぎ・さとる 熊本大学教育学部教授)